

～がん教育推進メッセンジャー（砂本和美）の話（要旨）～

1.はじめに

私は、今から10年ほど前に大腸がんが見つかりました。私には、主人と3人の子供がいますが、みんな男の子です。家族にとって私はご飯を作って掃除や洗濯をしてくれて当たり前の、“空気のような存在”だったと思います。このような、いて当たり前の家族の一人が突然いなくなるかも知れないと言う事態に直面しました。

2. がんが発見された時の話

その頃私は百貨店の子供服の売場で働いていました。勤務には早出・遅出があり、大変不規則な生活をしていました。12月からは一年のうちで一番忙しい時期を迎え、年末年始はほとんど休まずに働いていました。その頃、“体重は変わらないのにお腹が出てきたなあ・・・中年太りかしら？”とぼっこり出たお腹を見ながら思っていました。やっと一番忙しい時期を乗り越えて、少し落ち着いた1月末の日曜日、仕事中余りに体調が悪くなり仕事を早退しました。翌日病院で検査を受けた結果緊急入院することになり、「手術室の空くのを待って開腹手術します」と告げられました。

3. がんの手術と家族の様子

手術は運悪く三男の高校入試の日と重なりました。長男は輸血や点滴の針が刺さった私の手をただ黙ってそっと握って手術へ向かう私を見送ってくれました。入院中、主人は慣れない家事に悪戦苦闘したようですが、家族全員がそれぞれ私を心配し、当たり前にいるべき家族がいないことの重大さを改めて実感していました。

4. 家族との関わり

無事に退院し、1ヶ月半が過ぎた頃、抗がん剤治療が始まり、仕事にも復帰することができました。半年の抗がん剤治療を終えた頃、主人の兄ががんで亡くなりました。義兄は亡くなり、私は生きている事に考え込むことがありました。そんな時、主人が「家族全員が今年1年元気で暮らせたことに感謝してみんなで旅行に行こう。また来年も再来年も必ず家族揃って旅行に行けるように！」と言いました。それ以来、我が家では1年に1度家族全員が、忙しいスケジュールを合わせて旅行に行くことが恒例になりました。一人家を出ている長男は、お母さんが家の真ん中で笑ってないと、この家は回っていかないからね！と応援してくれます。

5. 伝えたいメッセージ

がんになったことで、空気のようにいるのが当たり前の、大切な誰かがいなくなるかもしれないということを、私も家族も改めて考えるきっかけになりました。家族、職場のスタッフ、病院でお世話になった方々はじめたくさんの方の励まし、支えが私に元気をくれました。当たり前にある、何気ない普通の毎日を過ごせることがどれだけ大切でどれだけありがたいことなのか、毎日何でも精一杯楽しんで笑顔で過ごせる事の喜びを皆さんにお伝えしていきたいと思っています。